

公益社団法人 全国学習塾協会

安藤 大作 会長



少子化時代における学習塾のこれから ——最大よりも「最強」を目指す一年へ

新年を迎えるにあたり、学習塾業界の来年以降の姿について、私なりの展望を述べたいと思います。

日本のある地方都市、人口約12万人の地域において、13歳人口はおおよそ1000人である一方、0歳人口は517人というデータがあります。これは13年後、中学1年生になる子どもが、現在の約5〜6割にまで減少することを意味します。新型コロナウイルスの流行期を挟んだこともあり、子どもの数は想像以上に急激に減少しました。

このような状況下で、規模拡大や教室拡張を至上命題とする経営は、シンブルに考えて矛盾をはらんでいます。マーケットそのものが縮小する中で、競争によって「最大」を目指すことは、ますます困難になっていくでしょう。だからこそ、これからの学習塾は「最大」ではなく「最強」を目指す時代に入ったと考えています。

最強の塾とは、生徒との結びつきが強い塾です。もちろん、難関校合格を目標とし、トップレイヤーの生徒を鍛え上げる塾の役割がなくなるわけではありません。しかし、少子化が進み、定員割れが

常態化する中で、受験そのものを主目的としたビジネスの需要は、徐々に薄れていくでしょう。

その代わりに求められるのは、その塾に通うことで子どもが前向きに生きられるようになること、自分の目標を見つけ、自分らしい人生を歩み始められることです。必要な学びにはしっかり取り組みながらも、「自分はこう生きたいのか」「自分は何者なのか」を考えるきっかけを与えてくれる場所。そうした自己発見や幸せへの道しるべを示す塾に、新たな価値が生まれてくると思います。

教育の目的を「幸せ」と捉えるなら、幸せには多様な形があります。成績向上だけが幸せではなく、それぞれが自分なりの向上を目指し、自分の人生を歩いていくこともまた幸せです。思春期に悩む若者に対して、生き方や得意分野、苦手を補い合える人とのつながり、思いやりやコミュニケーション力といった、人生を通して必要な力を育む役割を、塾が担う時代が来るでしょう。いつかその子の結婚式に呼んでもらえるような塾、そんな存在も一つの理想だと思います。

生徒募集の面では、宣伝以上に口コミの

力が強まっていくでしょう。新しい価値観が生まれる時、人は慎重になります。友達と一緒に通える、友達に自慢できる、行くことが誇らしい。地方では特に、こうしたエモーショナルな理由が大きな意味を持つようになります。

また、家庭・学校・地域という従来の枠組みの中で、家庭も学校も機能不全に陥りつつある今、学習塾が地域の一端として担う役割は確実に広がります。安心・安全な居場所であること、生活指導を含めた支援、そして学力面では200点以下の子どもを300点へと押し上げる力。こうした役割が求められるでしょう。

少子化時代の塾運営で重要なのは、退塾を出さないことです。その鍵は結局、塾生と先生の強い信頼関係にあります。合理化一辺倒ではなく、一見無駄に見える関わり——子どもの話をじっくり聞く、世間話を交わす、寄り添う時間——そこにこそ価値が生まれます。

今後は学校と塾の連携も進み、地域全体と交わりながら未来をつくる塾の姿が求められます。子どもの幸せを支えるセーフティネットとして、地域から信頼される存在であること。そのために、私たちは教育に携わる者として、自らの「教育への底力」を問いつける必要があります。

子どもが減った今こそ、条件に左右されない本質を見つめ直せば、学習塾の未来は、決して暗いものではない。そしてそのことで国の未来も照らしていけると、私はそう確信しています。